

道信中将の愛と死をめぐる憶説

——『公任集』の読解を中心に——

妹尾好信

一

平安中期の歌人藤原道信は、正暦五年（九九四）七月十一日に二十三歳で没したということになっている。^①この日付は『小右記目録』第二十・庶民卒に、

同月（正暦五年七月）十一日、左近中将道信^{〔藤原〕}卒事、

〔大日本古記録〕による）

とある記事によるのであるが、ここには享年は記されていない。ところが『勅撰作者部類』には、

道信（四位左中将。藤原恒徳公男。正暦五年廿三卒）

〔八代集全註〕による。（一）内は二行割）

とあり、この「廿三」が享年と考えられているのである。^②これを承ける形で、『二十一代集才子伝』には、道信の伝記の末尾に、

正暦五年卒。時年二十三。早世惜哉。

と書かれている。

〔八代集全註〕による）

そして、『日本紀略』の寛和二年（九八六）十月二十一日の条には、

○廿一日丙辰。右大臣息男於^{〔道信〕}淑景舍^{〔兼冬〕}御前加^{〔兼冬〕}元服。撰政養子也。授從五位上。有饗宴。弁少納言史等預^{〔兼冬〕}之。

〔新訂国史大系〕による。括弧内引用者注）

とあり、また『尊卑分脈』為光公孫にも、道信に注して、

正暦五月日卒

寛和二十廿一於凝花舍元服

為兼家公子用七男

〔新訂国史大系〕による）

とあり、ほぼ同様である。正暦五年（九九四）の享年を二十三とすると、道信が元服したのは十五歳の時ということになり、至って自然な年齢であるから、この伝えは認めてよからうと思われる。

二

『大鏡』為光伝には、

また、権中将道信の君、いみじき和歌の上手にて、心にくき人にいはれたまひしほどに、うせたまひにき。

〔日本古典文学全集〕による

とあるが、並々ならぬ歌才を發揮した道信の天折は先の『二十一代集才子伝』が言う通り、惜しんでも余りあるものであったと思われる。事実、道信の死を悼む同時代人の詠歌がいくつか残っている。

ひとつは、葬送の翌朝、藤原頼孝の詠んだ歌で、『千載集』巻九・哀傷歌の五五〇番に、

中将道信朝臣みまかりにけるを、おくりをさめての朝によめる
藤原 頼 孝

おもひかねきのふのそらをながむればそれかとみゆる雲だにもなし
〔新編国歌大観〕による

とある。頼孝は播磨守藤原季孝の子と考えられるが、道信との関係はよくわからない。おそらく近衛府の下級役人として道信の部下だったのではないかと思われるが、道信の早すぎる死を深く悼む気持ちがよく表れた歌だと言えよう。

また、『後拾遺集』巻十・哀傷歌・五七〇番には、

道信朝臣ともろともにもみちみむとちぎりてはべりけるに

かのひとみまかりてのあきよみ侍ける 藤原実方朝臣

みむといひし人ははかなくきえにしをひとりつゆけき秋のはなかな
〔新編国歌大観〕による

という実方の歌がある。道信と実方が生前特に親しくしていたことは、『道信集』からも窺われる。

三

道信の死因は明らかでないが、正暦五年という年は、春先から流行し始めた疫病が猛威を振るった年で、『扶桑略記』巻二十七によると、

正暦五年甲午、自正月_三至_三十二月_二、天下疫癘起_レ自_三鎮西_一遍_三満七道_一、五位以上七十余人疫死
〔訂史籍集覽〕による

というありさまであった。試みに『史料綜覧』巻一によつて正暦五年の条に見える疫病関係の項目を列挙してみると、次のようになる。

三月二十五日、内裏放火、及び疫癘ノ事ニ依リテ、諸社ニ奉幣ス
〔日本紀略・百練抄・本朝世紀〕

四月十日、疾疫ニ依リテ、大祓ヲ行フ〔日本紀略〕

四月二十日、疫癘ニ依リ、七犬寺ノ僧ヲシテ、重テ大般若経ヲ転

読セシム〔類聚符宣抄〕

四月二十四日、京中路頭病人多ニ依リテ、之ヲ収養セシム〔日本

紀略・本朝世紀)

四月二十五日、奉幣ニ依リテ、大祓ヲ行フ(日本紀略・本朝世紀)

四月二十七日、疾疫ニ依リテ、伊勢以下諸社ニ奉幣ス(日本紀略・

本朝世紀)

四月二十八日、疾疫ニ依リテ、御読経ヲ行フ(日本紀略・本朝

紀)

五月二日、神祇官陰陽寮官人ヲシテ、災厄疾疫ヲ占ハシム(日本

紀略・小右記目録)

五月三日、疾疫ニ依リテ山陵使ヲ發遣ス(日本紀略・小右記目録・

本朝世紀)

五月十三日、仁王会ニ依リテ、大祓ヲ行フ(日本紀略・本朝世紀・

西宮記)

五月十六日、疾疫ヲ免ンガ為ニ、諸人油小路ノ井水ヲ汲ム(日本

紀略・本朝世紀)

五月二十四日、京中諸国疾疫流行ス(本朝世紀)

五月二十六日、大祓、是日、疾疫祈禱ノ為メ諸司諸家ヲシテ、石

塔ヲ建テシム(日本紀略・西宮記・本朝世紀)

六月二十七日、疫神ヲ船岡山ニ安置シテ、御霊会ヲ行フ(日本紀

略・本朝世紀)

六月三十日、大祓(本朝世紀)

七月二十一日、疾疫ニ依リテ、御読経ヲ修セシム(日本紀略)

八月十日、疾疫ニ依リテ、大般若經ヲ転読セシム(日本紀略)

十月十六日、山陵使ヲ發遣シテ、疾疫ヲ祈禱ス(日本紀略)

十二月十七日、諸社奉幣使ヲ發遣ス(日本紀略)

以上のように、この年は年間を通じて疫病退散祈願の読経や祈禱、あるいは奉幣や大祓がしばしば行なわれていることがわかる。初秋の頃もその猖獗ぶりはただならぬ状況で、道信もおそらくはこの疫病によって若い命を奪われたものと想像される。

四

道信の詠歌と言えば、『百人一首』に採られた、「あけぬればくるものとはしりながらなほうらめしきあさぼらけかな」(『後拾遺集』卷十二・恋二・六七二)という恋歌が有名だが、彼は他にも多くの恋歌を残しており、短い生涯に情熱的な恋愛を少なからず体験したことが知られる。『道信集』の詞書を見ても、「ある女」とか「ある人」とかだけある誰とも知れない女性との間に交わされた恋歌が多いのだが、中で名の分かる相手としては、婉子女王、小一条の中の君、小大君、小弁らが挙げられる。その中で、花山天皇の女御であった婉子女王との恋は、当時かなり話題になったらしく、『栄花物語』や『大鏡』がこぞって取り上げている。

『栄花物語』巻四「見果てぬ夢」には、次のような記事がある。

小野宮の實資中納言、式部卿宮の御女、花山院の女御に通ひ給ふといふ事出てきたれば、一条の道信中将さし置かせける、

嬉しきはいかばかりかはおもふらん憂きは身にしむ心地こそすれ

我也懸想しきこえけるにや。〔栄花物語全注釈〕による)

小野宮實資が、式部卿宮為平親王の娘で花山天皇の女御だった婉子女王に通うという事態が発覚したので、道信中将が実資のもとにこっそり恨みの歌を届けたというのである。ここでは、道信も婉子女王に懸想していたのだろうかとやや自信なげに推測した評語が付されているが、『大鏡』には三角関係がもつとはっきりと書かれている。実頼伝には、次のようにある。

(実資ノ) 北の方は、花山院の女御、為平の式部卿の御女。院そむかせたまひて、道信の中将も懸想しましたまふに、この殿(実資) まるりたまひにけるを聞きて、中将の聞えたまひしぞかし、

うれしきはいかばかりかはおもふらん憂きは身にしむ心地こそすれ

この女御、殿(実資) にさぶらひたまひしなり。

(『日本古典文学全集』による。括弧内引用者注)

ここには私に傍線を付した(以下同じ)ように、「道信の中将も懸想しましたまふに」とあつて、道信の婉子女王に対する懸想が事

実として語られている。また師輔伝にも、

帝(花山天皇)、出家したまひなどさせたまひて後、また今の小野宮の右大臣殿(実資)の北の方にならせたまへりしよ、いとあやしかりし御こともぞかし。その女御殿(婉子女王)に

は、道信の中将の君も御消息聞えたまひけるに、それはさもなく、かの大臣に具したまひければ、中将の申したまふぞかし、「憂きは身にしむ心地こそすれ」とは、今の人の口にのりたる秀歌にて侍めり。

(『日本古典文学全集』による。括弧内引用者注)

とあつて同じことが語られているのであるが、ここでも「その女御殿には、道信の中将の君も御消息聞えたまひけるに、それはさもなく、かの大臣に具したまひければ」とあり、道信の失恋をより強調した語り口になっている。婉子女王が実資の妻になったことを「いとあやしかりし御こともぞかし」と批評しているが、これは単に花山天皇の出家後に再嫁したことを批判しているのではなく、申し分のない若い貴公子道信を振って道信より十五歳も年上の中年実資を選んだ婉子女王の選択を理解しがたいと言っているのではないかという気がする。

「うれしきは」の歌は『道信集』にも見えている。

女をうらみて

あるところに、うらやましきことをき、てきこゆる

詞

うれしきはいかばかりかはおもふらん　うきは身にしむものにこゝち

そありける (二六) (『私家集大成』道信 I による)

これは、島原松平文庫本の本文であるが、詞書は「あるところ」に、うらやましきことをき、てきこゆる」とあつて、ひどくほかした書き方になっている。これは『道信集』の他本でも同様で、『桂宮本叢書』に収められた書陵部蔵三本でも、若干の異同はあるものの、ほとんど変わりが無い。

勅撰集には、三奏本『金葉集』巻七・恋歌上・三六八番に、

女のがりつかはしける

藤原道信朝臣

うれしきはいかばかりかは思ふらんうきは身にしむ物にぞありける (『新編国歌大観』による)

とあり、また『詞花集』巻七・恋上・二二三番にも載る。三奏本『金葉集』の詞書は「女のがりつかはしける」とあつて、失恋した相手の女に贈った歌となっているのが特異であるが、これはおそらく典故とした『道信集』の詞書をそう理解したためのもので、必ずしも信じられない。松平文庫本『道信集』詞書の傍書にある「女をうらみて」でも、相手の女を恨んで贈った歌という理解になる。『詞花集』では題知らずである。「あるところ」……「きこゆる」という書き方は、相手が高貴な人であるような感じがして、いかにも婉子女王に贈ったかのように受け取られるのだが、ここはやはり歌の内容から見て、『栄花物語』や『大鏡』の伝えるように、婉子女王と結婚した実資を羨んで贈った歌と見るのがよいように思われる。

五

ところで、この歌の詠作年次であるが、『栄花物語』では、この事は長徳元年(九九五)の位置に置かれている。実資を中納言と呼んでいるのも、『公卿補任』長徳元年の条に、

〔権中納言 従三位〕(藤原)同実資三十一〔八月廿八日任。即右衛門督。九月五日別当如元。廿八日大皇太后宮大夫。〕

〔新訂国史大系〕による。(一)内は二行割

とあるように、彼は長徳元年八月二十八日に権中納言になっているので、それ以後のこととして記していることになる。しかしながら、道信はその前年の正暦五年に没しているから、これは成り立たない。松村博司氏はこの点について、「長徳元年条にあることは年紀上は正當な位置とはいい得ないが、挿話的な歌語りであるから、誤りではない」と言われ、また「実資が女王に通いはじめたことは、『公任卿集』に贈答歌があることで明らかであり、正暦五年ごろに始まったか」と推定されている。⁽⁴⁾

ここで松村氏が言及された「公任集」の贈答歌とは、次に掲げたものと考えられるが、これは実に興味深い問題を含んでいる。

その宮右大殿、式部卿の宮の女御の御もとにまゐりはじめ給ひて三日いといつれづれこよひまゐりて物がたりをもき

こえんとありければ

秋風の袂すずしきよひごとに君待つほどや人のうらみん(四一)

六)

返し

恨むべき人をばしらで秋風にをばなをあやな頼みけるかな(四

一七)

(『新編国歌大観』による)

こは書陵部蔵本を底本にした本文を掲げたが、贈歌の詞書によると、「そのの宮石大殿」すなわち実資が、「式部卿の宮の女御」すなわち婉子女王のもとへ通うようになつて三日目のこと、公任のところにも「とてもつれづれだから、今夜そちらに参上して物語でもいたしたい」と言つてきたというのである。通い始めて三日目と言へば、当時の作法から言つて、結婚が成立するか否かが決まる非常に重要な夜である。男はこの三日間は万難を排しても通わなくてはならないはずである。そんな大事な日に、実資は「いとつれづれ」と言い、今夜は公任のところへ行きたいと言つている。これはどういうことであろうか。そんなことを言われた公任も驚いて、「秋風の袂すずしきよひごとに君待つほどや人のうらみん」と言い、ちゃんと通つて行つてあげないと、もう飽きられたのかと思つて、毎晩待つているあの方はあなたを恨んでいるんじゃないかと、婉子女王のもとへ行くことを勧めているのである。それにしても実資の態度は、恋を成就した男としてははなはだ妙である。実資の返歌は、

「恨むべき人をばしらで秋風にをばなをあやな頼みけるかな」とあり、私のことを恨むような人のことを知らないで、困つたことに私は秋風の吹くにつけて私を招くような素振りを見せる尾花を頼りにしてしまつたことです、と言つている。この返歌について「公任集(5)」には、「返歌は実資が女御の側に立つて詠んだ歌であるのか、あるいは女御に早や三日目にして失望感を抱いたのか、やや判然としない。道信と婉子が恋仲であつたとされるが、こはそれを意識してのことか」と述べられている。実資が女御の側に立つて詠んだというのは無理だと思つし、やつと結ばれて二日通つただけで失望したというのも、結局実資は婉子女王を北の方にしている事実(『本朝皇胤紹運録』に、婉子女王に注して「寛和女御。後右大臣実資公室」とある)から見て考えにくいと思われる。

そこで、やはりこの贈答の背景には、道信のことが無視できないと考えられる。『栄花物語』「見果てぬ夢」が言うように、実資が婉子女王のもとへ通い始めたことを知つた道信が、恨みがましい歌を实資のところへ届けたとしたら、真面目男だつたとおぼしき実資はおそらく衝撃を受けたことであろう。それも、実資は道信と恋の鞘当てを演じていたつもりは全くなく、道信の歌を見て初めて道信の婉子に対する激しい恋心を知つたのだとしたらなおさらのことだつたであろう。実資はどうしてよいかかわからず、道信と親しい公任に相談すべく、今晩訪ねたいと言つて来たのではないであろうか。

公任はそのことはすでに察しており、そうは言っても二日間通つたところで逃げ出すべきではないと婉子女王のところへ行くよう勧めたのだと思われる。実資の返歌で、「恨むべき人」と言っているのは、実は婉子女王のことではなくて道信を指しているのであろう。公任はもちろん婉子女王を念頭に置いて「君待つほどや人のうらみん」と詠んだのであるが、実資はその「恨む」という語を、失恋して自分を恨んでいる道信に転じて、婉子女王と結ばれたことで自分を恨むべき人すなわち道信がいたことを全く知らないで、秋風に吹かれて招く尾花のように心惹かれる婉子女王に自分は頼ってしまったとは、と苦しい胸の内を訴えた歌と読むことができるのではないかと思うのである。「をばな」とは、あるいは実資を娘の再婚相手に選んだ女王の父為平親王の意向を指しているのかも知れない。

六

さて、この贈答が交わされたのは、公任の贈歌に「秋風の袂すずしき」とあることから、初秋、つまり七月上旬のことであつたことがわかる。もし、松村氏が言われるごとく、実資が婉子女王に通い始めたのが正暦五年のことであるなら、まさに道信が死去した頃のことになるのである。杉崎重遠氏は、実資と婉子女王の結婚について、「正暦五年に近い過去とするよりも花山天皇が出家された寛和二年に近い頃に求むべきであろう」と述べられ、詳しく考察された結

果、⁽⁶⁾ 永延二年(九八八)、実資三十二歳の時のことではないかと推定された。この年、婉子女王と道信とともに十七歳であつた。確かに杉崎氏の考証には首肯すべき点が多いのであるが、略本とは言え現存している『小右記』の同年の記事に結婚のことが全く見えないこと、また確かに婉子女王のこととわかる記事が『小右記』に現れるのは長徳三年(九九七)七月以降であることなどから、早い時期に想定するのはためらわれる点もあり、むしろ『小右記』の記事が現存しない正暦五年のことであつたと考えるのが無難にも思えるのである。『采花物語』は、これが疫病の流行した年の出来事だという認識から、翌長徳元年と誤認したのではないかと思われる。正暦五年に流行した疫病は、翌年になつても依然収まらず、関白道兼や左大臣重信ら多くの貴顕が命を失つていたのである。

七

実資が婉子女王に通い始めたのが正暦五年七月初めのことであるなら、道信はまさにこの恋に敗れた直後に没したことになる。実資が三日目になつて奇妙なためらいを見せたのは、道信の恨みがましい歌が届いたためではなく、彼が病に倒れたという知らせを聞いたためでもあつたかも知れない。道信の病は、都に蔓延していた疫病のせいであつたのだろうか、失恋による精神的なショックが発病を誘つたとも言えるのではなからうか。気弱になり、生きる望み

も失っていた頃であつてみれば、たちまち病氣は重くなり、数日のうちにひどく衰弱していったのであらうと思う。

『道信集』には、次のような記事が見える。

いたうわつらひ給ひければほかにわたしたてまつりけるに、
かきりにおほしければ、きたのかたの御もとへ山ふきのき

ぬたてまつり給ふとて

千くちなしのいろにや我みえにけん集

てやみにしぬる集(九三) 『私家集大成』道信Iによる)

重体に陥つた道信が、転地するに際して、北の方のもとに山吹製の衣につけて歌を送つたといふのである。山吹のくちなし色にかけ、思うことを言わずに死別することになる北の方への思いを述べた歌である。道信の北の方は藤原遠景の娘で、彼の養父道兼の北の方の妹であることが、次の『栄花物語』「見果てぬ夢」の記事から知られる。

又(道兼〔為光〕)一条の太政大臣(道信)の御子の中将をぞ我子にし

給て、この北の方の御おとうとをあはせ奉り給て、よろづに扱ひきこえ給ふ。 『栄花物語全注釈』による)

道信はこの北の方に、死に至る病に倒れた原因について、つまり婉子女王との恋について何も釈明せずじまいになったことを思い、日頃の疎遠を悔いる気持ちになつたのだと思われる。この歌は『千載集』巻九・哀傷歌・五四九番には、

わづらひ侍りけるがいとよわくなりけるに、いかなるかた
みにか有りけむ、やまぶきなるきぬをぬぎて、その女につ
かはし侍りける 藤原道信朝臣

くちなしのそのにやわが身入りにけんおもふことをもいはずや
みぬる

又いはく、みまかりてのち、女のゆめにみえてかくよみ
侍りけるとも 『新編国歌大観』による)

とあつて、北の方ではなく、「その女」に送つたとあり、いかにも婉子女王を思わせるがごとき書き方になつていて、興味をそそられる。また、左注には、道信が死後に女の夢枕に立つてこの歌を詠んだとする伝えを記しているのだが、これは『道信集』書陵部藏丙本卷末の「或本」からの増補歌群の末尾に載る同歌詞書に、

中将なくなりなむとして、二日三日はかり、かねてものもいはず、やかてあさましうなり給にけり、かの北のかた、なきなききて、なとかはかなきことをたに、のたまはずなりにけんとなきねにねたまひたりける夜の夢に、かくやうにみえて、のたまひける 『桂宮本叢書』による)

とある内容に類似するが、ここでは北の方の夢枕に立つたことになつている。北の方が正しいのだろうか、いずれにせよ説話化の方向性が窺えて興味深い。

こうして道信は婉子女王に失恋した後、わずか数日で命を失ってしまった。事情を知る者にとつては、まさに道信は恋に殉じたように見えたに違いない。一番衝撃を受けたのはやはり実資であつたらうが、公任も事情を知る者の一人として、ひときわ嘆きが深かつたと思われる。公任の北の方昭平親王の娘は、粟田閔白道兼の養女であり、道信はその道兼の養子であるから、身内も同然であつた。実資は公任の従兄であり、小野宮一族の当主的な存在であるから、その結婚について公任は傍観者ではいられない。婉子女王をめぐる三角関係を知つたとき、公任は言いようのない苦しい思いがしたことであらう。

実資がもと女御との結婚を望んだのは、祖父で養父となつた実賴が、醍醐天皇の女御であつた右大臣定方の娘能子を北の方としたことのひそみに倣おうとしたのかも知れない。親王の娘という貴種に對する憧れももちろんあつたであらうが、美女の誉れが高く、一時期にせよ山花天皇の寵愛を受けた女御に懸想したのであるから、実資はうわつた氣持ちではなく真剣に結婚を望んだはずである。そんな婉子に二日通つただけで失望したとは考えられない。実資がためらつたのはひとえに道信のことがあつたからで、公任の忠告に従い、結婚が成立すると、この十五歳年下の妻を実資は最大限に尊重

し深く愛したようである。

ところが、婉子女王は、長徳四年（九九八）の七月十三日に、二十七歳の若さで他界してしまふ。『日本紀略』では、長徳四年九月の条に、

（実カ）

○其日。前女御無位婉子女王卒。〔年廿七。華山院女御。為平親王女。〕

（新訂国史大系）による。括弧内引用者注。（一）内は二行割

とあり、婉子女王の卒去は九月のこととするが、『小右記』長保元年（九九九）七月の条に、

○三日、癸未、弘暎向禪林寺、故女御周忌法事日也、

○十三日、癸巳、今日故女御周忌日、仍於禪林寺修諷誦、（布五十端

（為平親王）
宮被修念仏、

（大日本古記録）による）

とあつて、七月十三日に女御婉子女王の一周忌の法要を行なつたという記事があることから、七月が正しいと考えられる。

『公任集』には、婉子女王の喪に服している頃の実資と公任との贈答が載っている。

をのの宮の中納言そめ殿の御おもひにて秋はてがたにきこえ給ひける

白河の紅葉をみてやなぐさまむよにふる郷はかひなかりけり

（一九五）

ときこえ給へりければ

つねならぬ思ひや何かなくさまむ山へはいとど木の葉散りつつ

(一九六)

〔新編国歌大観〕による)

「そめ殿」というのは、婉子女王の父為平親王が染殿式部卿と号した(『本朝皇胤紹運録』)ことによる呼び名と考えられる。「秋はてがたに」とあるので、この贈答が交わされたのは長徳四年の九月下旬の頃、ちょうど婉子女王の中陰が明けるころのことになる。愛する妻を失った実資の悲しみが痛切に表れた歌だと言えよう。翌年十月十日には禅林寺に改葬し、以後毎年忌日の法要を行なっていることが「小右記」に見えている。実資がこれだけ手厚く婉子女王を追悼した背景には、亡き道信への思いも働いていたのではないかと思われるのである。

九

さて、ここで公任と道信との関係に戻る。『道信集』の成立を考える上でよく問題にされるものであるが、『公任集』に、次のような贈答がある。

みちのぶの中將よみたる歌どもかきあつめたるかたみに見
せんといひやるとて

かくばかりふることかたき世中にかたみに^{見す}すめる跡にぞ有りけ

る(四五二)

かへし

ふることはかたくなるともかたみなる跡は今こんよにも忘れじ

(四五三)

〔新編国歌大観〕による)

普通、これは道信と公任が生前にそれぞれの家集を交換し合ったというように理解されており、『道信集』にこの贈答が載っていないこともあって、この時に交換された家集と現存本との関係が云々されている。しかしながら、私見によれば、これは公任と道信の間に交わされた歌ではなく、道信の死後、誰かゆかりの者が彼の詠草を集めて家集を作った、それを生前親しかった公任に故人の形見として見せたいと言って寄越したのだと考える。歌句は、傍書の「かたみに見する」の方が詞書の「かたみに見せん」に呼応してよいように思われる。⁽⁸⁾道信を失って生きているのもつらくてたまらないこの世の中だけでも、せめて故人の形見としてお見せする歌の集です、あるいは傍書によれば、歌の集ですが、これもまたまことにはかないことで、と言っているのである。公任がそれに答えて、自分もよき友であった道信を亡くして生きて行くのも困難なのはあなたと同じですが、この形見の詠草のことはたとえあの世に行っても決して忘れはしますまいと礼を言っているのだと考えられる。

安藤太郎氏は、この贈答を詳しく検討されて、「かくばかり」の歌の作者を公任とされ、「正暦五年秋七月の道信夭折後、公任は何らかの事情で公任の手許にあった、もしくは、他の人の手許にあった道信の歌を集めたものを亡き道信の形見にしようとする人物に言っ

てやつた」と解釈された。さらに、「公任が歌を贈った相手は早速公任に『古事は難くなるとも』の歌を返歌してきた。その人は誰かは不明であるが、当然、道信に縁故のある人物かその知人であろう」と推測されている。⁽⁹⁾従来通説にとらわれない斬新な解釈で、教えられることが多いのであるが、公任が道信の詠歌を集めて彼の縁者に送ったというのは彼の立場上どうも不自然で、むしろ逆に道信の縁者が彼の遺した詠草を整理してまとめたものを生前親しかった公任に形見として見てもらおうと送ったと考える方がよいように思われるのである。もし公任が主語であるなら、「いひやるとて」の部分に尊敬語がないのも気になる。明らかに他撰である『公任集』の詞書は、公任の動作には原則的に尊敬語が付くので、ここは「いひやり給ふとて」とあるべきところである。もつとも、例外的に尊敬語のない場合もある。『公任集』の詞書から「いひやる」および「やる」の用例を拾うと、次のようになる（いずれも主語は公任）。

☆いひやり給うける（八六）

・やり給うける（八八）

*やりける（一一二）

・やり給ひける（二六四）

・かへしやり給ふとて（三六〇）

・やり給ひたりければ（三八一）

・やりたまふとて（三八五）

☆いひやり給ひけるついでに（三九五）

・やり給ひけるせどうか（四五八）

・やり給うける（五一三）

・やり給うける（五一五）

・やり給うたりければ、……（五一六）

〔新編国歌大観〕による。括弧内は歌番号

詞書中に「いひやる」の語は四五二番歌の他に二例あるが、☆印のようにいずれも「いひやり給ふ」と尊敬語を伴っている。他に「やり給ふ」が九例あり、公任を主語にしながらも尊敬語が付かず「やりける」とあるのは*印の一例のみである。とは言え、この歌の場合、公任に対して他人が贈ってきたのを「いひやる」と表現するのはいささか気になる。が、これも相手の立場から記述したものと見れば認められようかと思う。「ふることは」の歌には、亡き友道信を偲ぶ恰好のよすがを得たという感動と深い哀悼の思いがこめられているように感じられる。なお、『統拾遺集』卷十六・雑歌上・一一五〇番には、

前大納言公任かきおきたる歌どもをかたみにみせんとちぎ
りて後、かくばかりふることかたき世の中にかたみにみす
るあとはかなさ、と申しつかはしたりける返事に

ふることはかたくなるともかたみなる跡はいまこむ世にもわす

道 信 朝 臣

れじ

〔新編国歌大観〕による)

とあり、公任の歌に答えた道信の詠として「ふることは」の歌が載っているが、これは「公任集」の贈答の主体を読み誤って採録したものと考えられる。

おわりに

あふれんばかりの歌才と情熱を抱いたまま夭折した道信中将を当時の人々は大いに惜しみ哀れんだ。その死の背景にはひとつのドラマがあったのであるが、それを知る人は多くなかったようである。

そういう中で公任は彼の愛と死のいきさつをよく知る立場にあったために、追悼の思いもまた特別なものがあつたのであろうと、そんな風に想像してみる。すいふんと憶測を並べたてたが、ひとつの仮説として提示した次第である。大方のご批正を請いたい。

〔注〕

- (1) 『和歌文学大辞典』(昭37 明治書院)の道信の項・『国史大辞典』第12卷(平3 吉川弘文館)の藤原道信の項など。なお、『和歌大辞典』(昭61 明治書院)の道信の項(斎藤熙子氏執筆)では七月八日没とするが、根拠は不明。

(2) 『大日本史料』が引く『勅撰作者部類』には「正暦五卒廿三」との異文注記がある。

- (3) 新日本古典文学大系10『千載和歌集』(平5 岩波書店)巻末「人名索引」。

(4) 『栄花物語全注釈 一』(昭44 角川書店)五三〇頁。

(5) 伊井春樹・津本信博・新藤協三共著。私家集全釈叢書7(平元 風間書房)三三四頁。

(6) 『婉子女王』『王朝歌人伝の研究』(昭61 新典社)所収。

(7) ただし、榊原本や松平文庫本には、巻末増補部分に、後掲の『統拾遺集』と同様の形で「ふることは」の歌を載せている。

(8) 四五二番歌の下の句、益田勝実氏蔵本は書院部蔵本の傍書に同じ(『公任集全釈』(異同)による)。

(9) 「道信集成立事情の一断面」『平安時代私家集歌人の研究』(昭57 桜楓社)所収。

〔付記〕 本稿は、平成五年度西日本国語国文学会(平成五年九月二五・二六日 於大分県労働福祉会館)において同題で発表した内容に基づいて成稿としたものである。発表時、今井源衛・迫徹朗・鶴久・工藤重矩の各先生に貴重な御意見を賜わった。原稿化に際して十分に生かすことができなかったが、心より感謝申し上げる次第である。

———せのお・よしのぶ、広島大学文学部助教———

《参考》 藤原道信略年譜

年次	年齢	月日	事	項	典拠
天祿三(九七二) 寛和二(九八六)	15	10・21	誕生。右大臣為光の五男。母は一条撰政伊尹の娘。撰政兼家の養子として、宮中の淑景舎〔尊卑分脈〕は凝花舎にて元服。従五位上に叙せられる。	(勅撰作者部類)	『日本紀略』・『尊卑分脈』・『中古歌仙三十六人伝』
永延元(九八七)	16	11・10	侍従に任ぜられる。		『中古歌仙三十六人伝』
永延二(九八八)	17	10・14	右兵衛佐に任ぜられる。		『小右記』
永祚元(九八九)	18	3・25	正五位下に叙せられる。		『中古歌仙三十六人伝』
	17	3・29	左近少将に任ぜられる。		''
	18	3・29	従四位下に叙せられる。この後、祭の日に実方と贈答する。		''
		3・25	近江介を兼ねる。		''
		3・4	但馬権守を兼ねる。		''
		3・20	一条天皇の春日社行幸試楽の一舞を勤める〔四位・右少弁〕。		『小右記』
		10・20	弓場始に出居次将を勤める。		''
正暦元(九九〇)	19	12・20	養父兼家の任太政大臣の儀の録事を勤める〔左四位少将〕。		『日本紀略』・『公卿補任』
正暦二(九九一)	20	9・21	養父撰政太政大臣兼家薨(六十二歳)。この後道兼の養子になるか。		『中古歌仙三十六人伝』
正暦三(九九二)	21	6・16	左近中将に転じる。		''
		6・16	美濃権守を兼ねる。		''
正暦四(九九三)	22	春	実父太政大臣為光薨(五十一歳)。		『日本紀略』・『公卿補任』
		秋	亡父為光追悼の歌を詠む。花山院とも贈答する。		『道信集』
		6月	亡父為光を悼む歌を連作する。		『道信集』
		7・26	亡父為光の喪明けに際して歌を詠む。		『拾遺集』・『道信集』
		7・27	相撲内取に御前に伺候する〔中将〕。		『權記』
		7・26	相撲召合に出居次将を勤める〔左中将〕。		『小右記』
正暦五(九九四)	23	7・11	この頃、養父道兼の北の方の妹(藤原遠景女)と結婚するか。従四位上に叙せられる(府旁)。		『采花物語』
		7・12	卒去。		『中古歌仙三十六人伝』
		7・11			『小右記目録』